

随想

街路樹

会員 市野 兼 仁

今日はお彼岸で、朝からどんより曇りがちのお天気であつた。自転車であつたこと好きを私は、街路樹を見ても廻ることにした。

国道二一七号線のバイパスに、一キロメートルほどつづくワシントンニヤは、植えられてもう四年目の春を迎えた。狭い歩道に一年中大きな葉を広げているので、さけて通らねばならないほど威勢がよい。

新興住宅地となつた城南区のプラタナスの並木は、道路完成と同時に植えられてやつと一年たつている。二メートルほどある木にはまだ枝も葉も少なく、四五百メートルほど続いているだけで寂しい。

街の中央通りにある柳の街路樹は、大手前から駅前まで約二キロメートルほど続き、もう二十年ほどになる。昨年の秋、せんていしたので雨に濡れた黒い幹には、まだ枝も葉も少なく、行きこう人は見玉きもしない。所は悄然としている。それでも取に近づくとつれて、樹は大きくなり、細い枝には若芽が吹き出し、春の息吹きを感じさせられる。

興人の住宅を真中に通る広い道路には、メタセコイヤ

の並木が二百メートルほど続く。近づかないとまた若芽は見えないほどであるが、無数の小枝が手を広げて、十年ほどたつた水の本一本が天をつき、すがすがしい。付近一帯は林のように静かだ。  
ここは佐伯には珍らしく異國風の所で、私は好んでこの道をよく通る。

佐伯市の街路樹は、古いもので昭和三十年頃植えたもので、まだ歴史が浅い。樹は年輪の重なつたものほど人々に潤いを与え、心を落着かせてくれるものだ。市内には四ヶ所に四種の街路樹が植わっている。それぞれが年令を経て、それぞれの場所にふさわしい樹を選んでいゝが、場所によつては、花の咲く街路樹もあつてよいのではなかろうかと思つたりした。

— NIKK「くらしのたより」投稿・放送ずみ —

賞書

長瀬津留周辺の物語

城南区 河野 典 一

(一) 木立から船で通学

小学生が橋をこいで、木立村から舟で佐伯まで毎日通学した話である。

佐伯高等小学校は今の佐伯小学校の敷地にあつて、佐伯町・鶴岡村・木立村の組合立であつた。木立村の児童は数人で組をつくり、舟道から小舟に乗って、交代にこぎながら茶屋が舟をめぐり、佐吉浜に舟を着けて通学して